様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３８９２

研究課題名（和文）教育困難校におけるサービス・ラーニングの影響に関する研究

研究課題名（英文）Study on the influence of service learning at high schools with educational difficulties

研究代表者
大束　貢生（OTSUKA, Takao）

佛教大学・社会学部・准教授

研究者番号：２０３５１３０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：教育困難校における教科「奉仕」の影響について一連の調査結果から、次のように考えられる。①教科「奉仕」の受講生に関しては、受け入れ団体での活動による自己発見から自己肯定感の向上が特に見られること、②教科「奉仕」担当教員に関しては、地域社会と連携することの重要性についての認識が高まること、③地域社会の受け入れ団体に関しては、学校教育に関わることで地域社会で学校を支える側面が見られる。こうした結果は、教科「奉仕」を通じた学校と地域社会の連携の推進に大きく寄与するものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：As for the influence of the subject "service" in the education difficult school, we report as follows.
① Students taking the subject "Service" improved self-affirmation by working with organizations that accept students in local communities.② Teachers teaching "service" increased awareness of the importance of cooperating with schools and local communities.③ Organizations that accept students in local communities increased their awareness of supporting schools by engaging in school education.④ From this result, we considered that collaboration between school and community by subject "service" has high educational effect.

研究分野：社会学

キーワード：サービス・ラーニング　教育困難校　学び　生徒　教師　地域社会　連携　調査

１．研究開始当初の背景

本研究で取り上げる東京都立高校の教科「奉仕」は、教育改革国民会議報告「教育を変える 17 の提言」（2000 年 12 月）や中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進等について」（2002 年 7 月）で打ち出した社会奉仕体験活動の重視・充実への方向性に沿って展開されている。社会奉仕体験活動の重視は、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012 年 8 月）で大学でのサービス・ラーニング（以下 SL）でも言及されており、最近の中等・高等教育機関でのインターンシップ、SL、プロジェクト/プロブレム・ベースド・ラーニング（以下 PBL）といった企業、地域社会、NPO・NGO との提携による教科群の配置という流れの中で展開されている。

こうした社会奉仕体験活動は、アメリカの SL を範としている。アメリカの SL は、アカデミックな教育と現場実習を結びつけるコーポラティブ教育の一環として展開されてきた。コーポラティブ教育の歴史は長く、1903 年のシンシナティ大学で始められた。SL の原理はプラグマティズム哲学によって基礎づけられ、プラグマティズムの提唱者である W.ジェームズや J.デューイら自身がその意義を評価した。高等教育における SL は全米大学連合が設立された 1985 年以降急速に広まったと言われている。大学の正規のカリキュラムのなかにボランティア活動等を導入し、学校教育と社会貢献活動の融合を目指している。

本研究は、アメリカの経験と議論から学びつつ、教育にかかわる文化と風土がいかに日本に伝播・移植され、生徒・学校・地域社会（企業、地域社会、NPO・NGO 等）にどのような影響を与えるのかについて独自の議論と展開することにつながるものである。

２．研究の目的

2007 年度に全東京都立高等学校において必修教科「奉仕」が開始された。これは日本における SL の展開の歴史において画期をなすことである。教育と実践を有機的に結合するコーポラティブ教育の一形態としてアメリカで始められたサービス・ラーニングは、日本では高等教育機関である大学において正課外や選択科目として導入された。しかし必修科目であり受講生の人数規模が巨大である点で、都立高校における展開はまったく次元を異にするものである。2012 年度には東京都教育委員会が教科「奉仕」を防災教育や道徳教育を含む新教科に発展させる方針を出したことを踏まえ、少数事例である教育困難校における教科「奉仕」の生徒・教員・地域社会への影響をインタビュー及び、質問紙調査と参与観察によって実証的に検討する。

３．研究の方法

教育困難校での教科「奉仕」の影響について、生徒への影響を質問紙調査とインタビュー、参与観察によって、学校や地域社会への影響をインタビューや質問紙調査によって明らかにする。

第一に、生徒への影響は短期的影響と長期的影響に分けられる。短期的影響は教科「奉仕」を第一学年に履修する直前と直後の生徒の意識の変化を分析し、長期的影響は最終年次の意識の変化を分析する。先行して行った教員インタビューによれば「問題を抱える」生徒は自己肯定感が低く社会と接点を持てないことが多い。先の調査では普通科高校の生徒の教科「奉仕」の影響として「社会に役立つ喜び」「認められることによる自信」「社会の一員としての自覚が規範意識や公共心の育成につながる」「地域に貢献する行動につながる」ことをあげた。この影響が教育困難校の生徒にも見られるのかについて、教科「奉仕」の参与観察や生徒自身への質問紙調査を行い明らかにしたい。

第二に、学校が教科「奉仕」を行うに当たって問題となるのが、生徒の社会奉仕体験活動を受け入れる地域社会の団体との連携である。学校はこれまで教職員と生徒との閉ざされた空間として維持されてきたために、地域社会にある既存の団体をとのように「発見」し「連携」していくのかについては、学校間でさまざまな差異がみられる。特に教育困難校は「問題を抱える生徒」が学ぶ高校とみなされ地域社会から「厄介もの」「迷惑施設」とされてきた経緯がある。教科「奉仕」の経験が、地域に開かれた学校へとつながるのかについて明らかにしたい。

第三に、「厄介もの」「迷惑施設」として遠ざけてきた地域社会が、生徒が活動を行うことをどのようにみているのか、また生徒を受け入れることによる問題点は何か、生徒の活動を受け入れることによって地域社会はどのように学校と共生することを目指しているのかについて明らかにしたい。

４．研究成果

＜平成 27 年度＞

①SL に関する研究動向や理論的な展開について最近の研究をフォローし、SL についての理論的検討を加えた。資料の整理と調査票の整理・分析をふまえ総合的な検討を行った。

②教育困難校の教科「奉仕」の参与観察について協力校 4 校の教科「奉仕」の授業見学、奉仕体験活動の見学及び活動報告会での参与観察を行った。

③教育困難校の教科「奉仕」受講生対象のインタビュー調査について協力校 4 校の教科「奉仕」の受講生である一年生に対して三学期に奉仕体験活動やそこから得た学びについて、9 回計 31 名にインタビュー調査を行った。

④教育困難校の教科「奉仕」受講生対象の短期長期的影響に関する質問紙調査の作成・調査について、協力校 4 教科「奉仕」の短期的

長期的影響を測るため質問紙調査の作成を協力校の教員と連絡を取りながら作成し、協力校１校に対してアンケート調査を行った。
⑤教育困難校が立地する地域社会の受け入れ団体へのインタビューの準備について、協力校３校の協力を得て、生徒の社会奉仕体験活動の見学時に簡単なインタビューを行い、次年度以降に行うインタビュー調査のラポール形成を行った。

＜平成 28 年度＞
①教育困難校の教科「奉仕」の参与観察の実施として、協力校それぞれの教科「奉仕」について、その事前学習や事後学習、及び奉仕体験活動を通じた地域の人々のかかわりについて、通年に渡って参与観察と行い、昨年度の受講生と比較しつつ、生徒の学びについての考察を行った。
②教育困難校の教科「奉仕」受講生対象の短期的影響に関する質問紙調査の実施・分析として、協力校それぞれの受講生に対して、教科「奉仕」開始の 4 月に事前調査を実施し、終了時の３月に事後調査を同一の質問紙を使用して行った。
③活動受け入れ団体担当者へのラポール形成を行い、インタビュー調査を実施した。

＜平成 29 年度＞
①協力校４校の教科「奉仕」授業見学及び受講生インタビュー、アンケートを行った。また協力校４校の教科「奉仕」受け入れ団体へのインタビューを行い、受け入れ団体が考える教科「奉仕」の意義・運用・課題について取りまとめを行った。
②前年度までに行った教科「奉仕」授業見学・受講生インタビューをまとめ、関西教育学会・日本教育実践学会・日本福祉教育・ボランティア学習学会において学会報告を行った。

一連の調査研究から、教育困難校における教科「奉仕」の影響については、次のように考えられる。
受講生に関しては、受け入れ団体での活動による自己発見から自己肯定感の向上が特に見られること、教員に関しては、地域とともに歩む学校としての認識が高まること、受け入れ団体については、学校教育に関わることで、地域で学校を支える側面が見られる。こうした結果は、教科「奉仕」を通じた学校と地域社会の連携の推進に大きく寄与するものであることが期待される。
一方、以下のような課題も考えられる。受講生に関しては、自己肯定感の向上を他の科目への興味にどのようにつなげることができるかについて、教員に関しては、運営負担の増大と引継ぎの困難さについて、受け入れ団体に関しては、受け入れ団体の目的と学校の教育目的の乖離を乗り越える方策についてなどである。

こうした成果は日本における SL の展開において全学必修の SL の影響として、これまで教育困難校での生徒の学び、学校・地域社会への影響に関する研究に新たな知見を与えるものである。
一方今回の研究では、SL を学校とともに支える地域社会へのアプローチがインタビューにとどまり、SL に対して学校からの視点に偏っていることがあげられる。今後は地域社会の受け入れ団体側から見た SL について調査を行うことによって生徒や学校だけではなく、地域社会に対しても影響を及ぼしているのかについて、地域社会の受け入れ団体の活動を中心として分析を行いたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　8 件）
①富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開（13）－教科「奉仕」がエンカレッジスクール等の生徒に与える影響－、査読無、関西教育学会年報、No.41、2017、pp.56－60
②柴田和子、山田一隆、富川拓、中根智子、日本におけるサービス・ラーニングの展開（12）－東日本大震災におけるボランティア活動経験者の意識や態度『大学生のボランティア活動に関する調査』より－、査読無、龍谷大学国際社会文化研究所紀要、No19、2017、pp.207－220
③山田一隆、富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開（10）－高校時代のボランティア活動経験類型からみた大学生の態度や行動－、査読無、龍谷大学国際社会文化研究所紀要、No19、2017、pp189－206
④富川拓、大東貢生、古川秀夫、日本におけるサービス・ラーニングの展開（9）－活動選択型の奉仕体験活動が及ぼす影響－、査読無、龍谷大学国際社会文化研究所紀要、No19、2017、pp.179－188
⑤大東貢生、古川秀夫、柴田和子、山田一隆、日本におけるサービス・ラーニングの展開（8）－部活動連携型奉仕体験活動による態度の行動の変化について－、査読無、龍谷大学国際社会文化研究所紀要、No19、2017、pp.167－187
⑥富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開（11）－教科「奉仕」が学校、地域に与える影響－、査読無、関西教育学会年報、No40、2016、pp.116－120
⑦山田一隆、米国高等教育におけるサービスラーニング:市民学習と学習成果をめぐる政策と評価枠組の概観、査読無、政策科学、No232016、、pp.113-136
⑧富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開（7）－困難校に対す

るインタビュー調査から－、査読無、関西教育学会年報、No39、2015、pp.56-60

〔学会発表〕（計　7 件）
①大東貢生、富川拓、日本におけるサービス・ラーニングの展開（11）－教科「奉仕」の長期的影響について－、第 69 回関西教育学会大会、2017
②富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開(12)－活動先選択型の奉仕体験活動が及ぼす影響－、第 20 回日本教育実践学会大会、2017
③古川秀夫、山田一隆、柴田和子、富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開（13）－有権者教育への示唆－、第 23 回日本福祉教育・ボランティア学習学会大会、2017
④大東貢生、山田一隆、富川拓、柴田和子、古川秀夫、日本におけるサービス・ラーニングの展開(10)－学生生活の諸側面の優先順位と態度特性、行動選好－、第 22 回福祉教育ボランティア学習学会大会、2016
⑤富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開(8)－教科「奉仕」がエンカレッジスクール等の生徒に与える影響－、第 68 回関西教育学会大会、2016
⑥大東貢生、山田一隆、富川拓、柴田和子、古川秀夫、日本におけるサービス・ラーニングの展開(9)－高校時代のボランティア活動経験類型からみた大学生の態度特性と行動選好－、第 21 回日本福祉教育・ボランティア学習学会大会、2015
⑦富川拓、大東貢生、日本におけるサービス・ラーニングの展開(7)－教科「奉仕」が学校、地域に与える影響－、第 67 回関西教育学会大会、2015

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大東　貢生（OTSUKA, Takao）
佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号：20351306

(2)研究分担者
古川　秀夫（FURUKAWA, Hideo）
龍谷大学・国際学部・教授
研究者番号：10209166

富川　拓（TOMIKAWA, Taku）
聖泉大学・人間学部・准教授
研究者番号：70369627

山田　一隆（YAMADA, Kazutaka）
岡山大学・地域総合研究センター・准教授
研究者番号：80460723

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
柴田　和子（SIBATA, Kazuko）